2024 年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

横溝 紳一郎（西南学院大学・教授）

2024 年度の最終日、3 月 31 日（月）に、日本語教育学会から一通の封書が届きました。全く身に覚えのないタイミングでしたので、「年会費を滞納したことは、確か一度もなかったはずだけど…。」「何かお仕事の依頼かなぁ…。」と考えを巡らせながら開封し、内容を確認したところ、学会賞の受賞のお知らせでした。あまりのことに、思わず「え゛ぇ゛ーっ！」と大声を上げてしまいました。しばらくして興奮がある程度収まったあと、今度は「私のようなものが、いったいどんな理由で学会賞を授与されることになったのだろう…。」と考え始めましたが、はっきりとした理由を自分では見つけることができませんでした。

数週間後に届けていただいた「授賞理由」を、姿勢を整えて、ありがたく拝読しました。私がこれまで行ってきたことが、学術研究・教育実践・社会的活動として記されていました。「顕著な活躍を称え、今後のさらなる活躍に期待」という文言に、小恥ずかしさを覚えながらも、とても嬉しかったです。

ハワイ大学大学院で修士号を取得後、ハワイ大学で日本語講師として毎回の授業に楽しく全力投球していたのですが、しばらくして「現場の日本語の先生方と、日本語教育についての研究をなさっている先生方との間には、何か大きな距離があるようだ。その距離をできるだけ小さくできないだろうか。」と考えるようになりました。当時の私自身は「現場の日本語の先生」の一人でしたので、「私自身が日本語教育についての研究ができる先生になれば、両者の真ん中に立って、距離を縮められるはず。」と考え、博士課程への進学を決めました。博士の学位取得後は、教育分野に特化して、様々な研究・実践を継続して行ってきました。その研究・実践の積み重ねが今回の受賞につながったことは、望外の喜びです。

今日まで様々な形でご指導くださった国内外の外国語（日本語・英語）教育関係者の皆さま、教育実践に関するたくさんの学びの機会を与えてくださった児童・生徒・学生・大学院生の皆さま、大きなエネルギーを常に与えてくださる我が愛する博多の街の皆さま、そして誰よりも大切な家族に、この場をお借りして心からの感謝を申し上げます。

2021 年 4 月に母校である西南学院大学に帰り、外国語学部で日本語教員養成プログラムを新たに立ち上げました。これからの日本語教育に求められる人材の育成に全力を注ぎ続ける所存です。そのプロセスの中で得られるたくさんの知見を、いろいろな形で情報発信していきたいと思っております。「人をつなぎ、社会をつくる」教育者でいられるように、今後も精進いたします。

みなさま、これからもどうぞよろしくお願いいたします。　ALOHA

2024年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

山本 冴里（山口大学・准教授）

戦争が怖いです。

ときおり、子どもたちが危険にさらされる状況を夢に見て、とびおきてしまうくらい怖い。ガザやウクライナの状況がたった数年でここまで変化してしまった（させられてしまった）いま、この子たちがこれから生きていくであろう――生きていってほしい長い年月のあいだ、きっと戦争を体験しないでいられる、という確信が、私にはありません。

いまはまだ、日本は、直接的には戦争に参加していないです。けれど、軍事費の急激な増大、憲法９条を変えようとする政府与党、抑圧的な言説が幅をきかせること、無関心、自分もまた知らないところで暴力に加担しているのではないかと思える状況、「公共」の私財化・・・そうしたすべてが、この先のより苛烈な時代につながっていくのではないかと、気がかりでなりません。

ふたつの対照的な住まいの話を、させてください。どちらも大切な人の暮らす家でした。ひとつはどこもかしこも外にひらけた家です。外廊下を持つ田の字構造で、寝室をのぞけばどの部屋からも、簡単に外との出入りができました。縁側に腰かけてお茶を飲みおしゃべりしていく近所の人。勝手口や玄関で、あるいは胸高の塀越しで、野菜やちょっとした土産物のやりとり。そうした光景は、日々の記憶として残っています。もうひとつの家は、ちょっとした要塞でした。昨今、玄関の二重鍵はめずらしくありませんが、その家の鍵は五重もの厳重なもの。あとから取りつけていったのです。窓は高いところにしかなく、しかも夕方に雨戸を閉めたあとは、両手で抱えあげるほどの太いかんぬきをおろすのでした。訪れる人は少なく、不意に近所の人が訪ねてくるなんて、あり得ないことでした。

私にとっては、開けっぴろげのひとつめの家のほうがずっと安心のできる場所だったことを、なつかしく、あたたかく思い出します。ひとたび何かあれば、たぶん近所の人が気づいてくれるだろう、助けてくれるだろうと感じることができました。ふたつめのほうでは、そうはいきません。面積としてはひとつめよりも広い家にいて閉塞感があり、いや増しに増すあるじの恐怖心は、私の心も染めていくようでした。

戦争を恐れる私は、おなじ文脈で、このふたつの家のことをよく思いだします。ひとつめの家のような場所が成りたつには、多層な「想像の共同体たち」の範囲で、言葉やモノのやりとりがあり、他者は自分の一部であり、自分は他者の一部であり、傷は共有され、互いが互いを支えあっているんだと感じられる状況が必要です。戦争が怖い私は、だから、そのような状況を創り支えていくために、より苛烈な状況を出現させないために、言葉によって抑圧的な状況に立ちむかい、風通しを良くしていきたいです。複数の、そして他者の言葉をつかうためらいと、歓びと、痛みと不安と・・・幾重にも錯綜する影と光を描きたいし、論じたい。

授賞のご連絡をいただいた時には驚きましたが、理由の最初に執筆を挙げてくださっていることを、とても嬉しく感じました。奨励賞の「賞」の部分ではなく、活動を「奨」められ「励」まされているんだという部分を意識して、これからも書き続けていくことを誓います。

2024 年度日本語教育学会 功労賞 受賞コメント

堀井 惠子（武蔵野大学・名誉教授）

ご連絡があったときは、青天の霹靂、しばしお返事ができませんでしたが、よく考え、ありがたくお受けすることにしました。

振り返ってみると大学卒業後、外資系銀行で 3 年、夫が赴任したイラクの日本企業で 3 年仕事をし、出産のため帰国、年子の二人の子どもと地域の活動に参加しながら過ごすうち日本語教育に出会いました。おりしも、留学生 10 万人計画で日本語学習者を増やそうという勢いの中、民間の養成講座で一緒に学んだ友人が 1985 年に立ち上げた日本語学校で教師デビュー、授業後同僚たちと「あーだこーだ」とプチ勉強会をし、学びあいながら授業の日々でした。そんな中、武蔵野大学の日本語教員募集に応募、日本語科目と日本事情を担当、留学生の日本語学習カウンセリングも始めました。「大学の専任日本語教員一人時代」が長かったのですが、日本語教員養成課程を設置、日本人学生も含めたゼミ担当も始まりました。そのころ受講した国立国語研究所長期研修はとても刺激的でした。

2002 年に生まれた「アカデミック・ジャパニーズ（AJ）」という新語？に興味を持ったことから科研グループで「AJ とは何か」の議論を重ねました。その後、2006 年のアジア人財資金構想で「ビジネス日本語（BJ）」が注目されたのを機に「BJ とは何か」を探り始めました。J-GAP ではアーティキュレーションについて触れ、AJ と BJ のアーティキュレーションの実践と研究も試みました。学会の国際連携委員として、ICJLE の企画運営をしたことで「世界の中の日本語」を見ることができました。（コロナでしばらく開催されなかった ICJLE が 2024 年に 6 年ぶりに開催されたのはうれしかったです。）

「突っ込みどころ満載」の私がなんとかこれまでやってこられたのは、常に素敵な先駆者と、ともに考える仲間がいて、自然な流れの中で色々な経験がつながってきたからではと思います。

退職後、「学士課程教育における AJ・BJ の意義と課題」のタイトルで博士論文をまとめることができました。日本語教育から生まれた AJ と BJ、そしてそのアーティキュレーションという概念は大学の学士課程における言語教育としても意味を持つのではないかという内容です。そして、AJ と BJ のつぎの CJ（コミュニティ・ジャパニーズ：造語）として、地域の小中学校の日本語指導員を始めましたが、これまでの経験だけでは太刀打ちできないものがあり、試行錯誤をかさねているところです。

育成就労制度が動き出し、これからの日本では就労外国人とその子どもたちの増加が見込まれます。多文化共生社会に向け、日本人側で気づいていくことが必要と生涯学習講座も始めたところですが、日本語教師の役割が「言葉を教える」だけではないことを改めて感じています。

日本語教育のおかげで、世界と社会に触れながら、笑いの多い楽しい日々を送ることができましたが、残念なことは、意欲的に学んだ日本語教員養成課程修了生に卒業後の仕事として即日本語教師の道を勧めるには「食べられる日本語教師の道がまだ少ない」ということです。認定日本語教育機関、登録日本語教員の制度がうまくつながっていくことを願います。今回、仲間とともに、たくさんの卒業生と家族が喜んでくれました。本当にありがとうございました。

2024 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

阿久澤 弘陽（京都大学・准教授）・河内 彩香（京都大学・講師）
佐々木 幸喜（京都大学・特定准教授）・河合 淳子（京都大学・教授）

この度は、『日本語教育』論文賞という栄えある賞を賜り、誠に光栄に存じます。全く想定外のことでしたので、通知を拝受した際、自分の事として受け入れるまでに時間を要しました。筆者ら以上に論文の価値を見出してくださったことに、心よりお礼申し上げます。

本研究は、大学の留学生教育の現場で日本語教育の枠を越えたより良い協働体制を作りたい、そのために日本語教育以外を専門としながら留学生教育に携わる人々の考えを知りたい、という素朴な欲求から始まりました。文献調査を進める中で、先行調査によるいわゆる理系の教員が留学生に日本語力を求めないという傾向の指摘や、ここ十数年の大学教育の国際化を背景とした留学生教育の英語化の推進に、大学での日本語教育の一実践者としてある種の危機感を覚えるようになり、留学生プログラムを統括する理系教員の方々の教育観を詳らかにする必要があると思うに至りました。

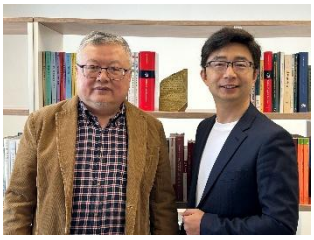
本研究では、A 大学の留学生プログラム P を運営する理系教員（論文では彼らのことを専門教員と呼びました）にインタビュー調査を行い、彼らの教育観を M-GTA で分析し描出しました。ここから、専門教員が留学生教育のために尽力する中で、理想とする教育理念と実際の教育現場の間に挟まれ様々な葛藤を抱えていることが見えてきました。「大学の留学生教育に日本語は｛必要だ／必要ではない｝」という信念も静的なものではなく、留学生が置かれる言語環境、教育現場の実際、大学からの留学生に対する期待、留学生の受け入れ戦略といった要因によって変わりうる動的なもので、専門教員は時に相矛盾する要請を解決する策を、常に模索しているということも分かりました。本論文ではさらに、専門教員の教育観の可視化を通して、大学における日本語教育に求められる役割と今後の協力体制についても論じました。得られた知見は全体からすればほんの僅かではありますが、大学で留学生教育に関わる者どうしの共通理解の形成や、より良い協働体制構築に取り組むための資料が提供できたのではないかと考えております。

GTA や M-GTA によって構築された特定の事柄に対する説明モデルは、現場への応用でもってはじめて意味を持ちます。本論文の知見が多くの方の今後の実践に資することがあれば我々としては望外の喜びです。さらに、実践の現場から得られる知見から、本論文が提示するモデルが修正され発展していくことも切に願っております。我々は、大学の国際化という不可避の潮流に対し、日本語教育の立場から多くの有意義な知見が提供できると確信しております。引き続き、大学の日本語教育の一担い手として、理論と実践の往還を通じた教育の充実を目指してまいります。

末筆ながら、査読者・選考委員の皆さまをはじめ、本研究を支えてくださった多くの方々、既に本論文を読んでくださった方、そしてこれから読んでくださる方に心より感謝申し上げます。また、本研究の調査にご協力いただいた A 大学留学生プログラム P にご関係の皆さまにも、この場をお借りして、改めて深くお礼申し上げます。（写真撮影：カーティス）

2024 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

李 文平（上海財経大学・准教授）・劉 海濤（復旦大学・教授）



この度は、『日本語教育』論文賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。心よりお礼申し上げます。学会から査読結果のメールを受け取るたびに、心拍数が上がり、息苦しくなるような緊張を覚えますが、今回のメールを開封すると、そこには受賞のお知らせが記されていました。しばらくは信じられず、マウスを持つ手の震えが止まりませんでした。

拙稿は、李ほか（2023）（『日本語教育』184 号）を修正中に、査読者の方々からいただいた貴重なコメントを出発点として執筆したものです。筆者 2 人はいずれも海外在住のため、紙媒体の文献の入手が困難であり、日本語学習者の文構造に関する先行研究を十分に調べることができていませんでした。査読者の方は、田丸ほか（1993）（『日本語教育』81 号）、田代（1995）（『日本語教育』85 号）、浅井（2002）（『日本語教育』115 号）などの研究を親切にご教示くださいました。これらの文献を参照することで、2002 年から 2022 年の 20 年間、『日本語教育』において文構造の複雑さに関する論文が掲載されていないことも明らかになりました。考えられる理由としては、文構造の複雑さを測る有効な指標が少ないことと、従来の指標は人手による判断を要するため、大規模な学習者のデータへの応用が難しいことなどがあげられるでしょう。

ここ 20 年間、自然言語処理や計量言語学は著しく発展してきました。文構造特性値（SSCV）（樺島・寿岳、1965）と平均依存距離（MDD）（Liu, 2008）は文構造の複雑さを分析する上で有用な指標になり得ると考えられます。SSCV の計算が複雑で、当時のコンピューター技術では十分に活用されませんでしたが、李ほか（2022）（『計量国語学』33 巻 7 号）は構文解析ツールの解析結果を利用し、文学作品の文体的特徴の分析に SSCV と MDD を応用しています。拙稿では李ほか（2022）を踏まえ、これらの指標を用いて学習者の文構造の複雑さの分析を試みました。その結果、従来の指標に比べて SSCV と MDD は文構造の埋め込みと横への拡がりをより精緻に測定できることが明らかになりました。

拙稿の成果は、学習者の習得状況の把握、学習効果の評価、シラバスの作成、新たなリーダビリティツールの開発、AI による言語産出の分析などへの応用が期待されています。今後の研究計画の 1 つとして、リーダビリティー・リサーチ・ラボ（柴崎・原、2010）、日本語文章難易度判別システム（李、2016）を参考にしながら、文構造の複雑さの指標を組み込んだリーダビリティツールの開発に取り組む所存です。また、特定のテキストを対象に説明可能なリーダビリティツールの結果と、生成 AI による結果とを比較することで、ブラックボックスとされる生成 AI の解明に微力ながら貢献してまいりたいと思います。

最後となりましたが、選考委員の方々、貴重なご助言を賜った査読者の方々、文献収集にご協力いただいた東北大学博士後期課程の熊子涵さん、日本語表現の確認にご尽力いただいた同課程の武井真美さんに、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

2024年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

村岡 貴子（大阪大学・教授）

この度は、学会活動貢献賞をいただくことになり、心より御礼申し上げます。事務局から最初のご連絡を受けた際には大変驚き、一体私は日本語教育学会に対して何の貢献ができたのかという疑問を持ちましたが、事務局のご説明によると、この賞は学会誌『日本語教育』への投稿論文の査読を長年行った個人に授与されるとのことでした。その説明を受けて即座に、長期間査読に関わらせていただいた私の方が改めて感謝の気持ちをお伝えすべきであると考えた次第です。

私がお世話になった『日本語教育』の論文の査読は、1)投稿論文を批判的に読み込んで内容理解に努め、2)論文の新規性や独創性等の長所を認識して言語化するとともに、3)論文のさらなる質向上を目指し、読者の視点から不明瞭な点や疑問点を含め論文改訂に資するコメントを、言葉を尽くして伝える作業である、と理解しています。この 3 点のアカデミックな書記言語コミュニケーションのうち、2)は多くの場合、長時間を要しませんが、1)と 3)は深い関連性を持ち、自分の論文スキーマに関する能力が試されるものでした。査読では、緊張感を抱きつつ、まるで試練のような作業に没頭する時間を過ごしたように思います。特に 3)では、作成したコメント案が投稿者に過不足なく理解されるか、また、どのような印象を持って読まれるか、などと読み手側の受けとめ方を想像します。そうすると、コメント記述の筆がなかなか進まず、日を置いて何度も改訂作業を繰り返していたことを思い出します。

そのように筆が進まない時には自分の経験を思い出すようにしていました。自分が投稿者の場合、査読者からのコメントを読む前には、採否の結果によらず、しばしば呼吸が浅くなるのを感じるほど緊張し、コメントの最後の一字一句を読み終わる頃には疲労困憊していた経験です。そこでは、「よし！改訂に向き合おう」と気持ちを奮い立たせるには時間を要します。自分の不備を認識することは時々辛いものですが、一方で、こちらが気づかなかった視点や示すべき知見への道筋を、配慮を持って丁寧に説明されたコメントに出会えば、投稿者として改訂作業への前向きな気持ちに切り換えられます。そうした背中を押されるコメントからは、研究に対する査読者の熱い思いが伝わり真摯な姿勢がうかがえます。こうして日本語教育学研究のためのアカデミックなコミュニケーションが着実に進んでいくものと考え、今回改めてその重責を感じております。

査読者にとって最新のテーマでの研究に触れることは幸運なことですが、それらの研究成果へのコメントを丹念に取りまとめる学会誌委員会の皆様にも感謝申し上げます。時には、複数のコメントの間に、論文に対する異なる見解や視点が見られることもあり得ます。そのような場合、投稿者にとってコメントが発するメッセージに矛盾が生じないよう必要な調整にご尽力いただいているものと存じます。このようにして、研究仲間同士の書記言語コミュニケーションが、日本語教育学会の顔の一つでもある学会誌の質の維持・向上と研究上の交流・啓発に貢献しているものであると、この機に再確認いたしました。